

10 mgのルテイン投与でAMDの治療を示唆

リッチャ 博士、米国の眼科学術誌で正式発表

米国の眼科学術誌「The Journal of the American Optometric Association」においてこのほど、「ルテイン 10 mgの投与で加齢黄斑変性に罹患した患者の視覚機能が改善された」とする論文が発表されました。この論文は米国・北シカゴ医療センター眼科クリニックのスチュアート・リッチャ 博士によるもので、90人のAMD患者を3群に分け、ルテイン 10 mg、ルテイン 10 mg + その他の抗酸化剤(ビタミンC, E, カロチン、亜鉛)、プラセボ をそれぞれ12ヶ月投与したところ、およびにおいて患者の視覚機能の改善が見られました。

ルテインはこれまで、1日6 mg摂取で加齢黄斑変性のリスクを低減することが明らかにされていたことから、アイケア目的のサプリメントに幅広く利用されてきました。医療現場におけるサプリメント利用が進む米国では、眼科医の6人に5人は、目に必須の栄養素としてルテイン摂取を推奨していると言われるほどです。近年ではわが国でも、日本眼科学会などの学会において、ルテインをはじめとする抗酸化剤のアイケアにおける役割に注目が集まってきています。

こうした中で発表された今回の論文でリッチャ 博士は、「ルテイン単体の場合でも、他の抗酸化剤と併せた場合でも、加齢黄斑変性の症状が改善される可能性がある」と述べ、1日10 mgのルテイン摂取で加齢黄斑変性に対する治療的な効果が示唆されることを明らかにしています。食品素材を使って眼疾患への治療的な効果が学術誌に正式に掲載されたのは史上初めてのことで、「眼疾患における食品素材の活用」という観点から、画期的な意義を持つ論文発表となりました。

ちなみに、リッチャ 博士は論文の中で「AMDは60歳以上の米国人の8人に1人が罹患しており、現在では治療方法が確立していない眼疾患である。従ってさらに大規模で長期間にわたる臨床試験が必要である」と述べています。すでに米国の国立健康研究所などもルテインを用いて臨床研究を継続していますが、今回のリッチャ 論文はこれらのルテイン研究にも大いに刺激を与えると見られるほか、アイケア目的のサプリメントにおけるルテイン利用がさらに広がることが期待されます。

スチュアート・リッチャー博士について

北シカゴ医療センター眼科クリニックチーフのみならず、イリノイ大学眼科学部(検眼医学)の助教授としても活躍。今回、リッチャー博士が治験責任者を務めた論文は、LAST (Lutein Antioxidant Supplementation Trial) 研究と呼ばれ、北シカゴ医療センター眼科クリニックの AMD 患者らを対象に行われました。

北シカゴ医療センター眼科クリニックについて

北シカゴ医療センターは、退役軍人局グレート・レイク・ヘルス・ケア・システムが運営する医療機関で、高品質でメンタル・ケアを含めた広範にわたる総合医療サービスを提供しています。メディカルセンターには、150 の医療用ベッドと 204 のデイケア介護ベッドのほか、住居を持たない退役軍人のケアを目的とした施設も備えています。こうした広範の医療サービスを提供するため、医療センターには、医療サービスのほか、二次的医療、外来手術受付、リハビリ医学など、高齢化が進む退役軍人の健康をサポートするための医療施設を備えています。

ルテイン情報局(Lutein Information Bureau: LIB)について

ルテイン情報局とは、1990年代半ばにヒトの健康に対する機能について知られ始めた「新しい」カロテノイドであるルテインについて、またその健康への役割についてインターネットを通じて情報提供することを目的とした非営利サイトです。アメリカでは2001年に、日本では2002年7月に活動をスタートさせました。ルテインの精製方法及びフリー体ルテインの製品で特許を取得しているケミン・フーズ L.C. がスポンサーとなり情報局の活動を支援しています。

ルテインに関する詳細は「ルテイン情報局」ウェブサイト <http://www.luteininfo.jp> をご参照ください。